

【釋文】 人皆の言は絶ゆとも 埴科の石井の手兒が言な絶えそね (卷十四、三三九八)

【口譯】 すべての人のおとづれは絶えても、埴科の石井の手兒の便は絶えない事を望みます。

【解説】 以下三首は、信濃の國の相聞の歌である。

【釋義】 言は絶ゆとも 言葉が絶えるとも、便の開えなくなるともの意である。埴科の 信濃の國の郡名。石井の手兒が イシキは地名と思はれるが、今の何處とも知られない。テコは、手古名と同じ語で、その地の民間の女子を言ふ。

信濃道者 伊麻能波里美知 可里婆禰爾 安思布麻之奈牟 久都波氣和我世

【釋文】 信濃道は 今の藝道 刈株に 足踏ましなむ 履著け我が夫 (卷十四、三三九九)

【口譯】 信濃道は新しく切り開いた道であります。木の切株に足をお踏みになるでせう。履をおはきなさいませ、我が君よ。

【釋義】 信濃道は 信濃の國に行く道、又は信濃の國の中でもその中心地方に行く道をいふ。この歌では、和銅年間に時の美濃の守であつた笠麻呂が切り開いた木曾道をいふと思はれる。次の今の藝道の句が、この道が出来て間もない時の歌である事を示してゐる。今の藝道 ハリは、土地を開拓する事。新に開かれた道を言ふので、木曾道を指してゐると思はれる。「新藝の今作る路」(卷十二、二八五五)とも詠んでゐる。刈株に 竹や木を切つたあとの切株。足踏ましなむ 足をお踏みになるでせうの意で、刈株で足を傷けるでせうと歌つてゐる。

奈牟、元曆校本による。

この句はもと足踏ましなむとあつたのであるが、今古本に依つて改める。

信濃奈流 知具麻能河泊能 左射禮思母 伎彌之布美氏婆 多麻等比呂波牟

右四首 信濃國歌

【釋文】 信濃なる 千曲の川の さざれ石も 君し踏みてば 玉と拾はむ (卷十四、三四〇〇)

右の四首は、信濃の國の歌

【口譯】 信濃の國の千曲川のさざれ石も、あなたがたお踏みになつたならば玉として拾ひませう。

【釋義】 さざれ石も 小石、砂礫もである。君し踏みてば シは助詞。君が踏みたればといふことを強く言つてゐる。

【後記】 千曲川の小石をも、君が踏んだならば、これを玉として拾はうといふのである。女の歌らしい。

可美都氣野 左野乃九久多知 乎里波夜志 安禮波麻多牟惠 許登之許受登母

【釋文】 上つ毛野 佐野の莖立 折りはやし 我は待たむゑ 今年來すとも (卷十四、三四〇六)

【口譯】 この上野の國の佐野の莖立を折りもてはやして氣長く待つてゐよう。よし今年は來ないでも來年は來るであらう。

【解説】 以下三首は上野の國の相聞の歌。

【釋義】佐野の莖立 ククタクチは菜、大根などの莖。特に莖立を料理に使ふので、莖立の賞味すべき野菜があつたのであらう。古語である。折りはやし ハヤシは榮して、折つて料理をすること。我は待たむる エは感動の助詞。自分は待たうよ。さぶしゑ、苦しゑ、等のエと同じ用法である。今年來ずとも 今年は來なくとも、來年までも氣長く待たむといふ意を含ませてゐる。兵士として行つた夫を待つてゐるのであらう。

伊香保呂能 夜左可能爲提爾 多都努自能 安良波路萬代母 佐禰乎佐禰氏婆

努自、元層校本等による。

【釋文】伊香保のの 八尺の堰に 立つ虹の 顯るまでも さ寢をさ寢てば (卷十四、三四一四)

【口譯】伊香保の沼の大きな堰處に立つ虹のやうに、現れるまでに寢たならばそれで満足だ。

【釋義】伊香保のの ロは接尾語。伊香保の沼のことを此處では言つてゐる。八尺の堰に 八尺のは大きいこと。堰は、河や池に石や土を盛つて水を湛へて置く處。立つ虹の ヌジは虹である。西行法師の歌集の詞に、「ぬうじ」と見えてゐる。此處では以上三句が序となつて、次の句を引き起してゐる。顯るまでに 現れるまでに、人々に知られる程にである。さ寢をさ寢てば 二つのサは接頭語。上のさ寢は名詞になり、下のさ寢は動詞になつてゐる。寢ることを寢たならばで、寢に寢たならばでも同じである。寢ることを強調してゐる。

【後記】堰處に立つ虹を序に用ゐたところが珍しい。下の主文も肉欲的で、東國の歌らしい氣分に富んでゐる。

伊香保禰爾 可未奈那里會禰 和我倍爾波 由惠波奈家杼母 兒良爾與里氏會

右二十二首 上野國歌

【釋文】伊香保嶺に 雷な鳴りそね 吾が上には 故は無けども 兒らに因りてぞ(卷十四、三四二一)

右二十二首(十九首略)は上野の國の歌

【口譯】伊香保の山に雷が鳴つていけません。私の上には何事もありませんが愛する人の爲にです。

【釋義】雷な鳴りそね カミは、雷を言ふ。上のナがなかれの意味になる。兒らに因りてぞ コラは、作者の愛する人を指してゐる。ラは單なる接尾語であつて、複数を意味しない。作者の妻が雷を恐れるので、その故に雷が鳴るなかれと希望するのである。兒らの故に因りてぞ雷なるなかれの意である。

志母都家努 安素乃河泊良欲 伊之布麻受 蘇良由登伎努與 奈我已許呂能禮

右二首 下野國歌

【釋文】下毛野 安蘇の河原よ 石踏ます 空ゆと來ぬよ 汝が心告れ (卷十四、三四二五)

右の二首(一首略)は、下野の國の歌

【口譯】下野の安蘇の河原を通じて石を踏ますに空から來ました。あなたの心を言つて

【解説】この一首は下野の國の相聞の歌である。

【釋義】安蘇の河原よ 下野の國にもと安蘇の郡といふのがあつた。その地を流れあらう。ヨはユと同語で、その中を通つてといふ意味を現す助詞。安蘇の河原から來たの意で、心も空に物おもひに耽つて何も覺えずにの意を現してゐる。

た事を現してゐる。汝が心告れ 斯くの如く私は訪れて来たのだからそなたの
ゐてゐる。

都武賀野爾 須受我於等伎許由 可牟思太能 等能乃奈可知師 登我里須

【釋文】 都武賀野に 鈴が音きこゆ 上志太の 殿の仲子し 鳥狩すらしも 野に、又曰は

【口譯】 都武賀野に鈴の音が聞える。上志太の殿の若様が鷹狩をしてゐると見える。

【解説】 以下は何處の國の歌とも知れぬのを集めてゐる。八首は雜歌の中から抄出した。

【釋義】 都武賀野に 所在不明。鈴が音きこゆ 鷹の尾につけた鈴の音が聞えるのである。上志

である。駿河の國に志太の郡があり、又攝津の國にも上志太の地がある。その他にも同名の地があ
殿の仲子し トノは、建築物の義からその家の主人を指す。この歌では上志太の地の支配者を指して

あらう。ナカチは、中の兒の意味で、若い人である事を語つてゐる。シは、助詞。鳥狩すらしも トガリ
鷹を以つて狩をする事。みつが野に 是も所在未詳である。若子し ワクゴは、若主人を言ふ。シは、助詞。
仲子しの別傳である。

須受我禰乃 波由馬宇馬夜能 都追美井乃 美都乎多麻倍奈 伊毛我多太手欲

【釋文】 鈴が音の 早馬驛の つつみ井の 水を賜へな 妹が直手よ (卷十四、三四三九)

【口譯】 鈴の音のする驛家の清らかな井戸の水を下さい。あなたの手から、ぢかに。

【釋義】 鈴が音の 驛馬の鈴の音で、次の句を修飾してゐる。早馬驛の ハユマは、早馬で、その馬の置いてあ
る驛のである。ウマヤは、宿驛を言ふ。つつみ井の 不淨にならないやうに周圍を圍つてある井。キは、飲用
水等を波み取る所で、水を溜めてある處を廣くいふ。水を賜へな 水を賜はれで、ナは調子を整へるために添
へた助詞。妹が直手よ タダテは、直の手で、妹の手から直接に水を賜への意である。妹と指してゐるのは何
者とも知れないが、多分その驛亭にゐる女子を指してゐるであらう。ヨはユに同じで、その人の手を通してで
ある。

許乃河泊爾 安佐菜安良布兒 奈禮毛安禮毛 余知乎曾母氏流 伊低兒多婆里爾

【釋文】 この川に 朝菜洗ふ子 汝も我も よちをぞもてる いで子賜りに (卷十四、三四四〇)

【口譯】 この川で朝菜を洗つてゐる御方、あなたも私も同じ位の子供を持つてますね。さあさあその娘さんを戴
きませう。

【釋義】 朝菜洗ふ子 朝菜は、此處では菜を洗つてゐる時が朝なのであらう。菜は一般に副食物を指していふが、

此處では青菜であらう。「いざ子供香椎の湯に白袴の袖さへ濡れて朝菜摘みてむ」(卷六、九五七)この歌の朝菜は
海藻と見える。洗ふ子は、洗ふ人に親んで言ひ懸けてゐる。多分女が菜を洗つてゐるのだらう。汝も我も あ
なたも私でもある。よちをぞもてる ヨチは同年輩の者をいふ。この歌主も菜を洗つてゐる女も、同じ頃の子
供を持つてゐるといふのである。いで子賜りに いではどうぞと頼む意味の語。賜りにはたばりねで、下さい

安佐菜、
余知、
元等、
本校、
等元、
による。

と頼む言ひ方。

【後記】 普通に、雙方に持つてゐる子が男女で、その子供達を互に見合はさうといふのであらうと言はれてゐる。この歌の表だけではどちらが男とも定められない。唯男女を一對にしようといふこと自身が興味が多いのである。同じ村の人同志で、縁を結ばうとしてゐるところが面白いのである。

思路多倍乃 許呂母能素低乎 麻久良我欲 安麻許伎久美由 奈美多都奈由米

【釋文】 しろたへの 衣の袖を 麻久良我よ 海人榜ぎ來見ゆ 浪立つなゆめ (卷十四、三四四九)

【口譯】 白い衣の袖を巻くといふが、その麻久良我から海人が船を漕いで來るのが見える。波よ立たないで下さい。

【釋義】 しろたへの 衣又は袖の枕詞。衣の袖を 以上の二句は序で、袖を纏くといふ意に次のマクを呼び起してゐる。麻久良我よ マクラガは地名であるが、下總の國の地名であらう。同じ卷に「麻久良我の許我の渡」(卷十四、三五五五)とも見えてゐる。ヨは、そこを通つての意。海人榜ぎ來見ゆ 海人が漕いで來る、それが見える。

乎久佐乎等 乎具佐受家乎等 斯抱布禰乃 那良敵氏美禮婆 乎具佐可知馬利

【釋文】 乎久佐壯子と 乎具佐助丁と 潮舟の 竝べて見れば 乎具佐勝ちめり (卷十四、三四五〇)

【口譯】 乎久佐壯子と乎具佐助丁と竝べて見れば、乎具佐が勝つてゐるやうに見える。

斯抱、可
知、類聚
る。古集
によ

【釋義】 乎久佐壯丁と ヲグサは、地名であらうが、所在未詳。下のヲグサも同様。乎具佐助丁と スケラは、助丁で、正丁に對して次丁を言ふ。潮舟の 枕詞。潮海を渡る船の意であらう。海には船を多く漕ぎ出るより竝ぶの枕詞とするのであらう。乎具佐勝ちめり 乎具佐助丁が勝つて見える。カチメリは、原文、可利馬利と書いてあつたが、今諸家の説により古本に上の利を知にして作つてゐるに従ふ。メリは、この集ではこの歌だけに用ゐられてゐる。

左奈都良能 乎可爾安波麻伎 可奈之伎我 古麻波多具等毛 和波素登毛波自

【釋文】 さなづらの 岡に粟蒔き かなしきが 駒はたぐとも 我はそもはじ (卷十四、三四五一)

【口譯】 さなづらの岡に粟を蒔いて、可愛い人の馬が食べても、私はさうとは思ひませんよ。

【釋義】 さなづらの 岡の名であらうが未詳である。元來この卷の未勘國の歌の中にある地名は、古人が既に考へて所在を明にしなかつたのであるから、わからないといふ方が本當である。岡に粟蒔き その岡を耕作して粟を蒔きといふのであるが、粟は人に逢ふといふことの縁で持ち出してゐる。逢はうとする心構へを、粟を蒔くといふ現し方をしてゐるのである。しかし此處ではそこに聯想があるだけで、さほど深い關係は考へないでよい。かなしきが いとしき者の意で、この歌は女の歌と見えるから、その愛する人、即男子を指して言つてゐる。駒はたぐとも タグは食する意の古語である。元來人に食を饗する意味に多く使つてゐるので、饗食する意味と考へられる。此處では先方の馬だから、多少さういふ氣持があるのであらう。「妻もあらば採りてたげまし沙美の山野の上の菟芽子過ぎにけらすや」(卷二、二二二)我はそもはじ 我はそれと思はじで、馬が食

つても、私はさうとは思はないだらうといふのである。好意を持てる人の馬が、折角作つた畑を荒しても、氣に掛けまいといふのである。

【後記】 野趣に満ちた歌である。馬に乗つて男の來るのを待つてゐる。その人の乗り棄てた馬が粟を食べても何ともないといふところが面白い。その間作者は無論その男に會つてゐるのである。

於毛思路伎 野平婆奈夜吉曾 布流久左爾 仁比久佐麻自力 於非波於布流我爾

【釋文】 おもしろき 野をばな焼きそ 古草に 新草まじり 生ひは生ふるかに (卷十四、三四五二)

【口譯】 おもしろい野をば焼かないで下さい。古い草に新しい草がまじつて生えれば生えるでせうに。

【釋義】 生ひは生ふるかに 生えれば生えるそのまゝにの意。野を自然のまゝにまかせて置き度い意を表してゐる。

可是乃等能 登抱吉和伎母賀 吉西斯伎奴 多母登乃久太利 麻欲比伎爾家利

【釋文】 風の音の 遠き我妹が 著せし衣 手本の行 糺ひ來にけり (卷十四、三四五三)

【口譯】 遠方にゐる吾が妻の著せた衣の腕の縦絲がよつて來ました。

【釋義】 風の音の 遠いの枕詞。遠き我妹が 作者は家を離れて遠くに旅してゐる。家なる妻を遠き我妹と稱してゐる。著せし衣 妻の著せた衣で、作者の今著てゐる衣服である。手本の行 クダリは、上から下へ通るものを言ふ。織物の縦絲を言ふ。袂の織絲の縦の方である。糺ひ來にけり マヨヒは、織物の絲が一方に寄つて穴

が出来をいふ。著古した意である。「今年行く新島守が麻衣肩の糺は誰か取り見む」(卷七、一二六五)

古非思家婆 伎麻世和我勢古 可伎都楊疑 宇禮都美可良思 和禮多知麻多牟

【釋文】 戀しけば 來ませ我が夫子 垣内柳 末摘み枯らし 我立ち待たむ (卷十四、三四五五)

【解説】 以下は國の未詳の東歌の中の相聞の歌である。

【口譯】 戀しいならばお出でなさい吾が君よ。垣の中の柳の枝先を摘み枯らして私は立つて待つて居りませう。

【釋義】 戀しければ 戀しからばの意。コヒシケは、形容詞戀しの將然形。垣内柳 垣の中の柳である。末摘み枯らし ウレは、木の若い枝先。手すさびにその柳の芽を摘んで立つて居ようといふのである。カラシは、枯れさせるである。これを刈らしめるの意に取るのは如何であらう。

伊禰都氣波 可加流安我手乎 許余比毛可 等能乃和久胡我 等里氏奈氣可武

【釋文】 稻春けば 輝る我が手を 今宵もか 殿の若子が 取りて嘆かむ (卷十四、三四五九)

【口譯】 稻を春きますから輝の切れる私の手を、今夜も殿の若様が取つて嘆くでせうか。

【釋義】 輝る我が手を カカルは、輝の切れる事。手の皮膚の裂ける事である。殿の若子が この家の若殿の意。取りて嘆かむ 輝の切れた手を取つて嘆くであらうかと、上の今宵もかを受けて結んでゐる。

多禮曾許能 屋能戸於曾夫流 爾布奈未爾 和我世乎夜里氏 伊波布許能戸乎

和我、元
唇校本等
による。

【釋文】 誰ぞこの 屋の戸押そぶる 新嘗に 我が夫を遣りて 齋ふこの戸を (卷十四、三四六〇)

【口譯】 誰ですか、この家の戸をゆすぶるのは。新嘗の祭に吾が夫を外に出して潔齋してゐるこの戸を。

【釋義】 屋の戸押そぶる オソブルは、押し動かす事。新嘗に その年の新穀を神に奉る祭。我が夫を遣りて

新嘗の祭は婦人の爲事であつて、最神聖な祭であるから、家中の男子を外に出してしまふのである。ヤルは、男を出して遣る意である。齋ふこの戸を イハフは、堅く物忌して出入を禁じてゐる意である。さういふ嚴肅な夜を來て戸を押し試みるは誰であるかといふ意味の歌である。

比登豆麻等 安是可曾乎伊波牟 志加良婆加 刀奈里乃伎奴乎 可里氏伎奈波毛

【釋文】 他妻と 何か其を云はむ 然らばか 隣の衣を 借りて著なはも (卷十四、三四七二)

【口譯】 人妻と何故それを言ふのでせうか。若しさういふならば、隣の著物を借りて著ないものでせうか。

【釋義】 何か其を云はむ 何としてそれを言ふかの意である。どうして人妻と稱して嚴重に手を觸れぬやうに區別するかの意である。然らばか 上を受けて、人妻に對して嚴重に區別するならば、それならばかういふ事は無いのかといふ意に言ひ起してゐる。借りて著なはも ナハは、否定の意の助動詞。ヌの古い活用ナに助動詞フが接續したものと認められる。否定の助動詞は古くはナメネと活用したと思はれる。借りて著ないであらうの意であるが、上の第三句にカがあるから、借りて著ないであらうかの意になる。一首の意は、人妻として特に區別するならば、それならば、隣人の衣服を借りて著ては悪いのであるかと理窟を言つてゐる。しかしかういふ歌があるのは、反つて古人の人妻に對する嚴肅な氣持を語るものである。

安禮婆、元曆校本、等による。

宇奈波良乃 根夜波良古須氣 安麻多安禮婆 伎美波和須良酒 和禮和須流禮也

【釋文】 海はらの ねやはら小菅 數多あれば 君は忘らす 我忘るれや (卷十四、三四九八)

【口譯】 水邊の根の柔い小菅のやうに澤山あるので、貴方はお忘れになつてゐる。私は忘れられはしない。

【釋義】 海はらの 普通海上をいふ言葉であるが、此處では海岸か入江の岸、又は大きな池の邊等の廣い處を指してゐる。舒明天皇の天の香具山から國見せられた御製の歌に、麓の池を海ばらと言はれてゐる。それと同じやうな用法であらう。ねやはら小菅 根の柔い小菅であらう。水邊の泥土の中に生ふる菅を言つてゐる。以上の二句は次の數多あればを引き起す序であるが、同時に譬喩の役目を持つてゐて、この菅を以つて愛すべき者に譬へてゐるであらう。數多あれば 小菅のやうに澤山あるからといふので、愛すべき人が多くあるのこの意味である。君は忘らす 忘らすは忘るの敬語法。私をお忘れになるの意。我忘るれや ヤは反語。今現に忘れ

てゐるのではないと反對にするのである。忘れめやと比較すると意味が善くわかる。忘れめやは、將來忘れるだらう、そんなことはないといふのであり、忘るれやは、今現に忘れる、そんなことはないといふのである。忘ると思へや、逢はむと言へや等、動詞の已然形に直接に反語の附く形はこれと同じである。【後記】 君は引く手數多の御身であつて、私如き者はお忘れになつていらつしやるといふ嫌味の歌であるが、上二句を序に持つて來た行き方で感じが善くなつてゐる。四五句に忘るを使つて變化させてゐるところも巧である。これも女の歌である。

宇知比佐都 美夜能瀬河泊能 可保婆奈能 孤悲天香眠良武 伎曾母許余比毛

【釋文】 うちひさつ みやのせ川の かほ花の 戀ひてか寝らむ きそも今宵も (卷十四、三五〇五)

【口譯】 あのみやのせ川の貌花のやうに、戀をして寝てゐるであらう。夕べも今夜も。

【釋義】 うちひさつ 枕詞。普通にウチヒサスと言つてゐる。日が照る意味で、宮の枕詞になつてゐる。みやの

せ川の 所在不明。かほ花の 今日何に當るか不明。朝顔夕顔等かほの語の附く花は、大きな圓形を持つてゐる花であつて、カホといふのは人間の頬を意味してゐるものと思はれる。かほ花といふのもさういふ花の類であらう。かほ鳥と合せて考ふべき語である。以上三句は序で、次の句の寝るを引き出してゐる。花が夜になつて萎むのから、寝るといふのである。戀ひてか寝らむ 自分の思ふ人は戀をしてか寝てゐることであらうと推量する語法。動詞ヌに推量の助動詞ラムが接続した形。句切。きそも今宵も キソは昨夜である。

【後記】 この歌も序の美しさで持つてゐる。遠く旅に出てみやのせ川の岸に咲くかほ花を見て、思を寄せた歌であらう。東國人が衛士か何かに召されて、京に上つて来て詠んだ歌である。これは男の歌で、残して來た妻を思つてゐる。かほ花は序に使つてゐるが、我が妻の面輪を思ひ浮べてゐるであらう。

爾比牟路能 許騰伎爾伊多禮婆 波太須酒伎 穗爾氏之伎美我 見延奴己能許呂

【釋文】 新室の 言壽に到れば はた薄 穗に出し君が 見えぬ此のころ (卷十四、三五〇六)

【口譯】 新築の御祝を申しに参りましたが、色に現れた君の見えぬこの頃でありますよ。

【釋義】 新室の言壽に到れば

新築の家の言壽に行けば。コトギは、コトホギで、人々集つて祝言をなす事。はた薄 次の穗に出しの枕詞。穗に出し君が 作者に對して面に現れてゐる君で、心中の思が表面に現れるを穗に出ると言ふ。見えぬ此のころ その君が何か子細があつて、此のころ何の折にも逢ふ事の出来ない物足りなさを歌つてゐる。

可良須等布 於保乎曾杼里能 麻左低爾毛 伎麻左奴伎美乎 許呂久等曾奈久

【釋文】 鴉とふ 大輕率鳥の 眞實にも 來まさぬ君を 兒ろ來とぞ鳴く (卷十四、三五二一)

【口譯】 鴉といふ輕々しい鳥が、本當にも御出でにならない君を、來た來たと鳴いてゐる。

【釋義】 鴉とふ 鴉といふに同じ。大輕率鳥の ヲソは、輕率、輕佻などの意。ヲソロとも云つてゐる。もと虚言の意に解してゐたが、それは誤である。鴉を大變に輕佻な慌て者の鳥と云つてゐる。眞實にも 誠にも、實際にも。兒ろ來とぞ鳴く コロクは、兒が來るの意で、鴉の鳴聲がコロクと聞えるので、鴉がかの君が來ると鳴いてゐると云つてゐる。吾が思ふ人が來もせぬに慌て者の鴉が來たと鳴いてゐるといふ意である。

伎曾許曾波 兒呂等左宿之香 久毛能宇倍由 奈伎由久多豆乃 麻登保久於毛保由

【釋文】 きそこそは 子ろとさ寝しか 雲の上ゆ 鳴き行く鶴の ま遠く思ほゆ (卷十四、三五二二)

【口譯】 夕べこそはあの子と寝たことだつた。今は雲の上を通つて鳴いて行く鶴のやうに、本當に遠くに思はれる。

【釋義】 子ろとさ寝しか 子は愛する人。ロは接尾語。さ寝しかは、サは接頭語、寝は動詞。シカは過去の助動詞。上にコソがあるのでシカと結んでゐる。雲の上ゆ 遙なる雲の上を通つて。鳴き行く鶴の 以上二句は、次のま遠くを引き起す爲の序である。ま遠く思ほゆ マは接頭語。本當に遠い感じをま遠くと言つてゐる。

【後記】 昨夜我が妻と寝て今朝別れて来たばかりなのに、あの大空を渡る鶴のやうに、本當に遠く隔つた感じだと歌つてゐる。旅に出て大空高く鶴の鳴き行くのを見て、詠んだ歌であらう。事物の捉へ方といひ、非常に巧でしかも素樸の感を失はない。善く整つた優れた歌である。

等夜乃野爾 乎佐藝彌良波里 乎佐乎左毛 彌奈敵古由惠爾 波伴爾許呂波要

【釋文】 等夜の野に 兎親はり をさをさも 寝なへ兒故に 母に嘖ばえ (卷十四、三五二九)

【口譯】 等夜の野に兎を窺つてゐる、その兎のやうにしかとも寝ない兒故に母親に叱られました。

【釋義】 等夜の野に 所在未詳。兎窺はり 兎を窺ひである。以上二句は、次のをさをさの序となつてゐる。ヲサの音を重ねたのである。をさをさも しかとも。寝なへ兒故に ナへは、否定の助動詞で、ナフの轉であらう。寝ぬ兒故である。母に嘖ばえ コロバエは、叱責する事。コロバエは、叱られる事。

波流能野爾 久佐波牟古麻能 久知夜麻受 安乎思努布良武 伊敵乃兒呂波母

【釋文】 春の野に 草食む駒の 口息ます 吾を偲ぶらむ 家の兒ろはも (卷十四、三五三二)

【口譯】 春の野に草を食ふ駒のやうに、口をやすめずに私を念つてゐるであらう家の妻はどのやうにしてゐるであらうか。

あらか。

【釋義】 草食む駒の 以上二句は、次の口息ますを起さんが爲の序である。口息ます 口に言ふ事をやますに。吾を偲ぶらむ 自分を戀ひ慕つてゐるであらうの意で、連體形である。家の兒ろはも イヘノコは、家に残して置いた妻。ロは、添へて云ふ語。家の妻はどうであらうかと下を省略した語氣。

久敵胡之爾 武藝波武古宇馬能 波都波都爾 安比見之兒良之 安夜爾可奈思母

【釋文】 垣越しに 麥食む小馬の はつはつに 相見し兒らし あやに愛しも (卷十四、三五三七)

【口譯】 柵越しに麥を食ふ小馬のやうに、辛うじて見た兒がほんに愛すべく思はれる。

【釋義】 垣越しに麥食む小馬の 柵の間から首を出して麥を食ふ小馬の意で、次のはつはつの序としてゐる。辛うじて麥を食ふ意である。はつはつに 辛うじて、僅に。あやに愛しも アヤニは、ほんとに、誠にといふ程の副詞。カナシは、愛すべくある意。

左和多里能 手兒爾伊由伎安比 安可胡麻我 安我伎乎波夜美 許等登波受伎奴

【釋文】 左和多里の 手兒にい行き遇ひ 赤駒が 足搔を速み 言問はず來ぬ (卷十四、三五四〇)

【口譯】 左和多里の手兒に行き遇つて、赤馬の足の運びが早いので物を言はないで來た。

【釋義】 左和多里の 地名。所在未詳。手兒にい行き遇ひ テヨは、民間の女子の事。イは、接頭語。赤駒が 作者の乗つてゐる馬で、赤い馬。足搔を速み アガキは、馬の足の運びで、歩みである。それが早いので。言

問はず來ぬ 物を言はないで來たの意。

安平楊木能 波良路可波刀爾 奈乎麻都等 西美度波久末受 多知度奈良須母

【釋文】 青柳の 萌らる川門に 汝を待つと 清水は汲まず 立ち處平らすも (卷十四、三五四六)

【口譯】 青柳の芽を出して來た川岸で貴方を待つとして、清水は汲まないであちこちと踏みならしてゐることである。

【釋義】 萌らる川門に ハラロは萌れるの方言。柳の芽の脹んでゐるのを張るといふ。川門は、川の兩岸が迫つて門のやうになつてゐる地形。清水は汲まず セミドは清水である。川の水を汲みに來たのであらう。或るいは川岸の湧水等を想像してもよい。立ち處平らすも タチドは立つてゐる場處、ナラスは踏んで平らかにする。

【後記】 女が川岸に水を汲みに出て來て、水を汲まないでその邊をうろくしてゐるところを詠んでゐる。青柳の萌え出す頃を歌ひ入れてゐるのが生氣を興へてゐる。全體に素樸感の満ちてゐる歌である。

可能古呂等 宿受夜奈里奈牟 波太須酒伎 宇良野乃夜麻爾 都久可多與留母

【釋文】 彼の兒ると 宿すやなりなむ はた薄 裏野の山に 月片寄るも (卷十四、三五六五)

【口譯】 あの兒と寝ないでしまふでせうか。裏野の山にもはや月も傾いてゆくことである。

【釋義】 彼の兒ると あの人と特に指す人があるであらう。ロは、接尾語。はた薄 枕詞。薄の末葉の意に裏に

宿受夜、
元曆校本
等に
よ

懸つてゐる。裏野の山 所在未詳。屋後の山かも知れない。月片寄るも 月が傾く事を歎息する語氣で、既に夜が更けて曉方になつた事を歌つてゐる。

安村毛敞可 阿白久麻夜末乃 由豆流波乃 布敷麻留等伎爾 可是布可受可母

【釋文】 何思へか あじくま山の 樸樹の 蒼まる時に 風吹かすかも (卷十四、三五七二)

【口譯】 何と思つてか、あじくま山の樸樹の窄んでゐる時に風が吹くことである。

【釋義】 何思へか 何と思へばかで、條件法に疑問の力が附いてゐる。如何に思つてか風が吹くことだと五句に懸る。あじくま山の 所在未詳。樸樹の ゆづり葉である。蒼まる時に ゆづり葉の葉がまだ擴がらずに固つてゐる時に。風吹かすかも 風がお吹きになることだで、フカスは吹くの敬語吹かすである。しかし敬語ではあつても風が吹いてゐる位の意味で、強い敬意は無い。

【後記】 全體譬喩を以つて出來てゐる。こちら側が若くて時期が到らないのに、既に風が襲つて來るといふのである。女がまだ年頃にならないのに、男が言ひ寄つて來ることを歌つてゐる。作者はその女自身か、又はその保護者であらう。譬喩の面白味を味ふべき歌である。

二 北國の歌

萬葉集には特に北國の歌といふ項はたてゝないが、今集中の能登、越中兩國の歌とせるを集めて、この項を作る。おほむねその國の民間の歌であらうと思はれる。

能登國歌三首

堦楯 熊來乃夜良爾 新羅斧 墮入和之 河毛但河毛但 勿鳴爲曾禰 浮出流夜登將見和之

右歌一首 傳云 或有愚人 斧墮海底 而不解鐵沈無理浮水 聊作此歌 口吟爲噓也

【釋文】 能登の國の歌三首

梯立の 熊來のやらに 新羅斧 墜し入れわし 懸けて懸けて 勿泣かしそね 浮き出づるやと見むわし

(卷十六、三八七八)

右の歌一首は、傳へ云ふ、ある愚人、斧を海底に墜して、しかも鐵の沈みて、水に浮ぶ理なきことを解らず。いささか此の歌を作りて、口吟みて噓すことを爲しき。

【口譯】 梯立の熊來の泥海に新羅斧を墜し入れた。決してお泣きなざるな。浮き出るかと思ておませうよ。

【解説】 能登の國の歌である。この歌に就いては、左註に説明がある。その傳へには、ある愚人があつて、斧が海の底に落ちて鐵の浮ぶ道理がないのを知らないのである。この歌を作つて諭したとある。なほ愚人が鐵が水中に落した事については、呂氏春秋に、楚人有涉江行舟、自舟遺劍。遽刻其舟曰、吾於此墜劍。

求必得之。其迷有如此者。とあるのを基としたものであらうと言はれてゐる。

【釋義】 梯立の 枕詞。梯子をたてる意である。熊來に續く義は不明であるが、多分倉に續くのから轉じたものであらう。熊來のやらに クマキは、能登の國能登郡の地名。ヤラは、水の底の泥を云ふ。新羅斧 朝鮮風の斧で、當時優れた貴重な斧であらう。墜し入れわし ワンは、噓子の語。下のも同じ。懸けて懸けて カケテは、決して。同語を重ねたのは意味を強めるためである。勿泣かしそね ナナカシは、お泣きなざるの意。ソネは、言葉を丁寧にする助詞。

堦楯 熊來酒屋爾 眞奴良留奴和之 佐須比立 率而來奈麻之乎 眞奴良留奴和之

右一首

【釋文】 梯立の 熊來酒屋に 眞罵らる奴わし 誘ひ立て 率て來なましを 眞罵らる奴わし (卷十六、三八七九)

【口譯】 熊來の酒屋に怒鳴られてゐる奴、誘ひ立てゝ連れて來ませうものを、怒鳴られてゐる奴。

【釋義】 熊來酒屋に 熊來の地の酒造の家に。眞罵らる奴わし マは、接頭語。ヌラルは、罵らるで、悪く言はれてゐる奴である。ワンは噓子ことば。率て來なましを キテは同伴して。來なましをは來たであらうものを、さうしなかつた意である。

【後記】 この一首は旋頭歌である。但しワシの噓子ことばがある爲にちよつと變つて聞える。

所聞多禰乃 机之島能 小螺乎 伊拾持來而 石以 都追伎破夫利 早川爾 洗濯 辛鹽爾

高坏、類聚古集等による。意改

第五章 東歌と北國の歌

一三一四

古胡登毛美 高坏爾盛 机爾立而 母爾奉都也 目豆兒之習 父爾獻都也 身女兒乃習

【釋文】 加島嶺の 机の島の 小螺を い拾ひ持ち来て 石以ち 啄き破り 早川に 洗ひ濯ぎ 辛鹽に こゝと採み 高坏に盛り 机に立てて 母に奉りつや めづ兒の刀自 父に獻りつや みめ兒の刀自 (卷十六、三八八〇)

【口譯】 加島嶺の机の島の小螺を拾つて来て、石を以つて啄き破り、早川に洗つて鹽でこしこし採み、高坏に盛り机にのせて、お母さんに差し上げましたか、可愛らしい小さい奥様。お父さんに差し上げましたか、美しい小さい奥様。

【釋義】 加島嶺の 所聞多の三字をカンマと讀むのは、義を以つてである。能登の郡の地名。机の島 加島嶺のほとりの机の島である。小螺を 螺形の小さい貝。諸國の海にも居り今も多く産する。い拾ひ持ち来て イは、接頭語。ここと採み ココは、螺の肉を鹽で採む音。高坏に盛り タカツキは、椀形の器で、足の高くついてゐるもの。めづ兒の刀自 メヅコは、愛すべき兒である。トジは、一家の主婦の稱。習は刀自の合字である。みめ兒の刀自 ミメコは、みめよき兒の意で、美しい兒を言ふ。

越中國歌四首

大野路者 繁道森徑 之氣久登毛 君志通者 徑者廣計武

【釋文】 越中の國の歌四首 大野路は 繁道森徑 繁くとも 君し通はば 徑は廣けむ (卷十六、三八八二)

【口譯】 大野に行く路は草木の繁つた路である。しかし繁くあつても君がお通ひになつたならば路は廣いでありませう。

【解説】 以下四首は越中の國の歌である。

【釋義】 大野路は オホノは、越中の國の地名。繁道森徑 草木の繁き路で、森の路である意。

澁谿乃 二上山爾 鷺曾子産跡云 指羽爾毛 君之御爲爾 鷺曾子生跡云

【釋文】 澁谿の 二上山に 鷺そ子産とふ 翳にも 君が御爲に 鷺そ子産とふ (卷十六、三八八二)

【口譯】 澁谿の二上山に鷺が子を産むといふ事である。翳にも君の御爲にならうとして鷺が子を産むといふ事である。

【釋義】 澁谿の二上山 越中の射水郡の山。澁谿も同所の地名。翳にも サシハは、鳥の羽根や薄い織物などで作つた柄の長い團扇形のもので、貴人の前に侍者が差し出してその面を覆うてゐる道具。貴人の顔を下の者に見られるのを憚る意である。鷺の羽根を翳に用立てようと鷺が子を産むといふ意の歌である。

伊夜彦 於能禮神佐備 青雲乃 田名引日良 霖會保零

【釋文】 伊夜彦 おのれ神さび 青雲の 棚引く日らに 霖そぼ零る 一云 安奈爾 可武佐備 一に云ふ あ (卷十六、三八八三)

【口譯】 伊夜彦は自分から神さびて青雲の棚引いてゐる日も小雨が降つてゐる。

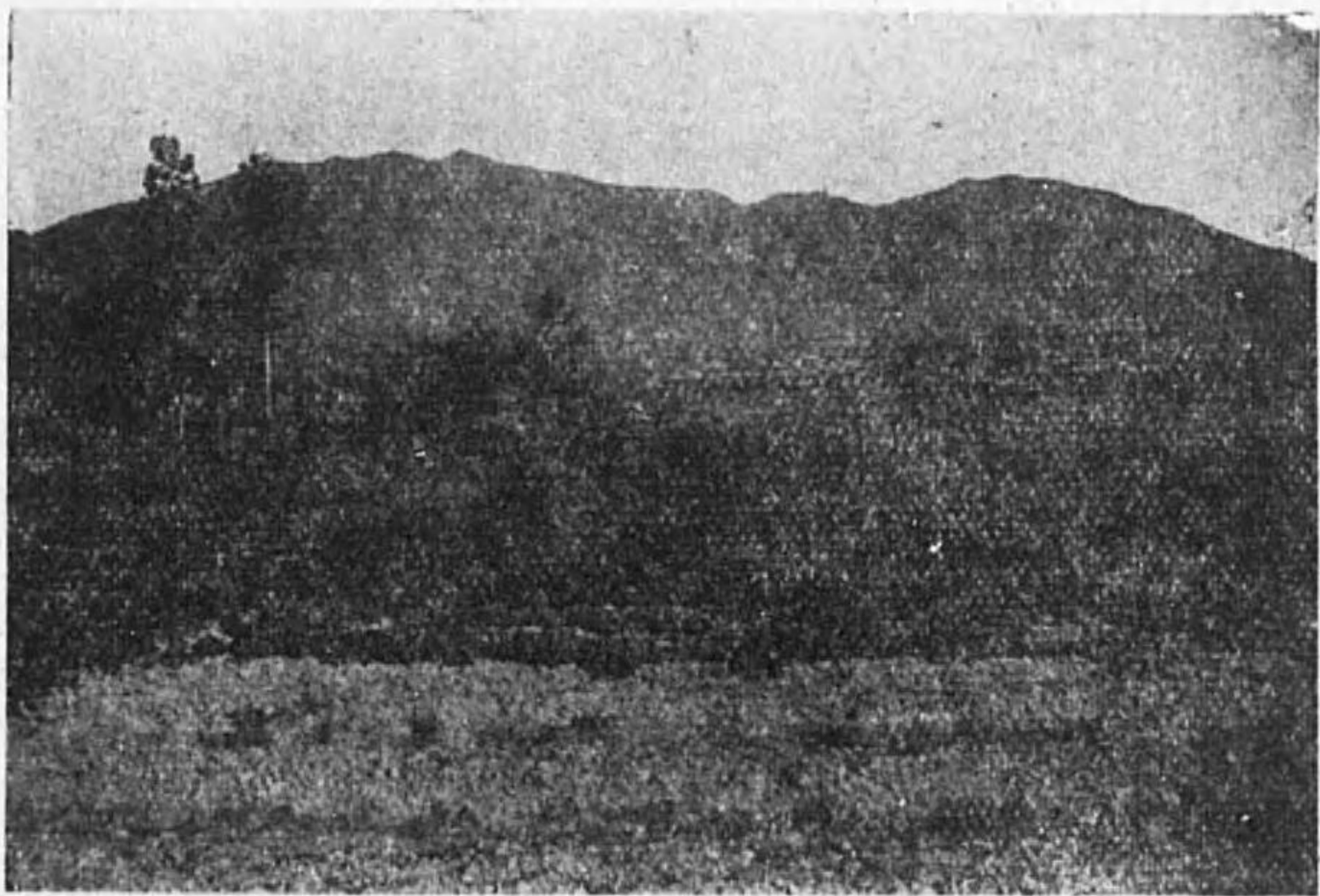
【釋義】 伊夜彦 越後の國の彌彦山を言ふ。但し越中の國の歌にかく越後の山を詠めるは不審である。この句の

澁谿、西本願寺本等に於ける。

原文、伊夜彦とあるが、この彦の字は、古くは産とあつたものと思はれる。それを中世に彦の字に改めたと傳へられてゐる。西本願寺本の朱の頭書に、或る人が夢の考に依つて改めたといふ事を語つてゐる。恐らくはもとは伊夜立山とあつたのではないかと思はれる。おのれ神さび 自分から神様としての意。青雲の棚引く日らに 空一面に晴れ渡つてゐる意である。日ラのラは接尾語。あなに神さび アナニは、感動の副詞。この句は一云としてあるが、若し他の句の校異ならば、二句の校異と見る外はないが、この次の歌が明に六句の所謂佛足跡の歌の體であるから、この句もまたこの歌の第六句であつたものを、後の人が誤つて一云の二字を加へたものであらうかと思はれる。

伊夜彦、
西本願寺
本による

伊夜彦 神乃布本 今日良毛加 鹿乃伏良武 皮服
著而 角附奈我良



山 彦 彌

【釋文】 伊夜彦 神の麓に 今日らもか 鹿の伏すらむ 皮服著て 角附きながら (卷十六、三八八四)
【口譯】 伊夜彦の神の麓に今日も鹿が寝てゐるであらうか、皮の著物を著て角を附けたまゝで。

【釋義】 伊夜彦 この句に就いては前の歌と同様に考へられる。神の麓に 山を直に神と稱してゐるのは山岳崇信の現象である。今日らもか ラは、接尾語。皮服著て 鹿が皮服を著ると言つてゐる。角附きながら その皮服に角が附いたまゝでの意。

【後記】 この歌は、五七五七七の六句から成つてゐる。この體は奈良の西にある薬師寺の佛足跡の歌の碑に彫りつけてある歌の體なので、是を佛足跡の歌の體と稱することになつてゐる。萬葉集中、この體の歌は、明なものはこの歌たゞ一首のみである。しかし前の歌にも言ふやうに、第六句であるべきを後の人がこの體に馴れないので、誤つて一云の二字を付け添へたものもあらうと言はれてゐる。薬師寺の佛足跡の歌の碑は、第六句を小字で彫り著けてある。これは歌の内容は一旦第五句までで完結し、第六句は第五句を少しく形を變へて繰り返すか、進んでは歌意の内容の補足的な性質のものに及んでゐる。今この伊夜彦神の麓の歌では、第六句をも上と同じやうに大字で書いてあるが、これもやはり歌の内容は第五句までで完結し、第六句は第五句の内容を補足する性質のものであらうと思はれる。なほ参考の爲に佛足跡の歌の歌の數首録しておく。

御足跡作る石の響は天に到り地さへ揺れ父母が爲に 諸人の爲に
ますらをの踏み置ける足跡は石の上に今も残り見つつしのべと 永くしのべと
四つの蛇五つの鬼の集れる穢き身をば厭ひ捨つべし 離れ捨つべし
雷の光の如きこれの身は死の大君常に副へり 畏づべからずや

萬葉集新解終

萬葉集年表

仁德天皇 元年(九七三)酉癸	正月三日、天皇即位。
允恭天皇 元年(一〇七二)壬子	十二月、天皇即位。
四十二年(一一一三)巳癸	十月、木梨輕の太子薨す。
安康天皇 三年(一一一六)申丙	十一月十三日、雄略天皇即位。
崇峻天皇 五年(一二五二)壬子	十二月八日、推古天皇即位。
推古天皇 二十九年(一二八一)辛巳	二日五日、聖德太子薨す。
舒明天皇 元年(一二八九)己丑	正月四日、天皇即位。
十一年(一二九九)亥己	十月十二日、飛鳥の岡の傍に遷り給ふ。是を岡本の宮といふ。
十三年(一三〇一)丑辛	十二月十四日、天皇、太后、伊豫の湯の宮に幸し給ふ。
皇極天皇 元年(一三〇二)寅壬	十月九日、舒明天皇崩す。
孝德天皇 大化元年(一三〇五)乙巳	正月十五日、天皇即位。
白雉五年(一三一四)寅甲	六月十四日、天皇即位。
齊明天皇 元年(一三一五)乙卯	十月十日、孝德天皇崩す。
	正月三日、齊明天皇、板蓋の宮に即位す。

二年(一三一六)辰丙
四年(一三一八)午戊

七年(一三二一)酉辛

天智天皇六年(一三二七)卯丁
七年(一三二八)辰戊

八年(一三二九)巳己
九年(一三三〇)午庚

弘文天皇元年(一三三二)申壬
十年(一三三一)酉辛

天武天皇元年(一三三三)酉癸

十月、飛鳥川原の宮に遷り給ふ。

是の歳、後の飛鳥岡本の宮に遷り給ふ。

十月十五日、天皇、紀の温湯に幸す。

十一月、有間の皇子を紀の行宮に召す。

十一月十一日、丹比小澤國襲をして有間の皇子を藤白の坂に絞せしむ。

正月六日、海路西征の途に就く。

十四日、御船、伊豫の熱田津の石湯の行宮に泊つ。

七月二十四日、天皇、朝倉の宮に崩す。

三月十九日、都を近江大津の宮に遷す。

正月三日、天智天皇即位。

五月五日、蒲生野に獵し給ふ。

十月十六日、藤原鎌足薨す。

二月、庚午年籍成る。

十二月三日、天皇崩す。

七月二十三日、弘文天皇崩す。

是の歳、天武天皇、飛鳥淨御原の宮に遷り給ふ。

二月二十七日、天皇即位。

三年(一三三五)亥乙

六年(一三三八)寅戊

七年(一三三九)卯己

十一年(一三四三)未癸

持統天皇
朱鳥元年(一三四六)戌丙

三年(一三四九)丑己

四年(一三五〇)寅庚

五年(一三五二)卯辛

六年(一三五二)辰壬

八年(一三五四)午甲

二月十三日、十市の皇女、阿閉の皇女、伊勢の神宮に詣つ。

四月二十日、麻績の王因幡に流さる。

四月七日、十市の皇女薨す。

五月五日、天皇吉野に幸す。

七月四日、天皇、鏡の姫王の家に幸し病を訊ひ給ふ。五日、鏡の姫王薨す。

九月九日、天武天皇崩す。

十月三日、大津の皇子に死を賜ふ。妃山邊の皇女殉死す。

十一月十六日、大伯の皇女歸京。

四月十三日、日並みし皇子(草壁の皇子)薨す。

九月十三日、天皇紀伊の國に幸す。

八月十三日、十八氏(大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野

大伴、紀伊、平群、羽田、阿倍、佐伯、采女、穗積、阿曇、)に詔して其の祖等の

纂記を上進せしむ。

九月九日、川島の皇子薨す。

三月六日、天皇、伊勢に幸す。

四月五日、淨大肆を筑紫の大宰率河内の王に贈る。

九月九日、天武天皇の御齋會。

十年(一三五六)丙申

十二月六日、藤原の宮に遷る。

七月十日、高市の皇子薨す。

文武天皇元年(一三五七)丁酉

八月一日、持統天皇讓位。文武天皇即位。

三年(一三五九)亥己

七月二十一日、弓削の皇子薨す。

四年(一三六〇)庚子

四月四日、明日香の皇女薨す。柿本人麻呂の作品中、年月の明なる最後。

八月二十日、僧惠俊を還俗せしめ、吉宜の姓名を賜ふ。後神龜元年吉田連の姓を賜ふ。

大寶元年(一三六一)辛丑

正月十五日、大伴御行薨す。二十三日粟田真人を遣唐執節使、無位山上憶良を遣唐少録とす。

三月十九日、僧辨紀を還俗せしめ、春日藏首老の姓名を賜ふ。

九月十八日、太上天皇(持統天皇)、天皇、紀伊の國に幸す。

十二月二十七日、大伯の内親王薨す。

二年(一三六二)壬寅

十月十日、太上天皇(持統天皇)三河に幸す。

慶雲元年(一三六四)甲辰

五月十日、改元。

七月一日、粟田真人等唐より還る。

二年(一三六五)乙巳

五月八日、忍壁の親王薨す。

三年(一三六六)丙午

二月六日、大神高市麻呂卒す。

四年(一三六七)丁未

六月二十四日、譽謝の女王卒す。

九月二十五日、難波の宮に幸す。

六月十五日、文武天皇崩す。

七月十七日、元明天皇即位。

元明天皇

正月十一日、改元。

和銅元年(一三六八)戊申

三月十三日、田口益人上野の國司に任ぜらる。

五月三十日、美努の王卒す。

六月二十五日、但馬の内親王薨す。

三月十日、都を平城(寧樂)に遷す。

九月十八日、太安麻呂に文武天皇の勅語の先代舊事と帝皇日嗣とを撰録せしむ。

正月二十八日、太安麻呂、古事記を奏上す。

四月、長田の王を伊勢に遣す。

九月三日、詔して多治比嶋、大伴御行の妻の貞節を嘉す。

五月二日、諸國に詔して風土記を編せしむ。

二月十日、紀清人、三宅藤麻呂に詔して國史を撰せしむ。

五月一日、大伴安麻呂薨す。

六月四日、長の親王薨す。

元正天皇

靈龜元年(一三七五)乙卯

萬葉集年表

七月二十七日、穗積の親王薨す。

九月二日、元明天皇讓位。元正天皇即位、同日改元。

八月十一日、志貴の皇子薨す。

三月三日、石上麻呂薨す。

九月十一日、美濃の國に幸す。

十一月十七日、改元。

十二月十三日、多治比縣守等、唐より還る。

三月四日、大伴旅人を征軍人持節大將軍とす。

五月二十一日、舍人親王日本紀を撰し、紀三十卷系圖一卷を奉る。

八月十三日、藤原不比等薨す。

正月二十三日、佐爲の王、紀男人、山田三方、山上憶良、刀利宣令等をして、退朝の後東宮に侍せしむ。學藝ある者に賞賜を加ふ。背奈行文、山田三方、紀清人、津守通、吉宜等これに預る。同月二十七日、諸道堪能なる者に加賞して後生を勵さしむ。

五月十二日、笠麻呂、太上天皇(元正天皇)の御爲に出家して滿誓と號す。

正月二十日、穗積老を遠流に處す。

二十八日、廣瀬の王卒す。

二月二日、滿誓を造筑紫觀世音寺別當とす。

二年(一三七六)丙辰
養老元年(一三七七)丁巳

二年(一三七八)戊午
四年(一三八〇)庚申

五年(一三八一)辛酉

六年(一三八二)壬戌

七年(一三八三)癸亥

聖武天皇
神龜元年(一三八四)甲子

二年(一三八五)乙丑

三年(一三八六)丙寅

四年(一三八七)丁卯
五年(一三八八)戊辰

天平元年(一三八九)己巳

五月九日、天皇、吉野離宮に幸す。

七月七日、太安麻呂卒す。

二月四日、元正天皇讓位。聖武天皇即位。改元。

三月一日、天皇、芳野の宮に幸す。

十月五日、天皇、紀伊の國に幸す。

三月、三香原の離宮に幸す。

五月、芳野の離宮に幸す。金村、赤人の歌。

十月十九日、難波の宮に幸す。

九月十五日、印南野に幸す。

正月、王臣等を授刀寮に散禁す。

夏、大伴旅人の妻大伴郎女死す。

七月三十一日、山上憶良、筑前の國嘉摩の郡に於いて、子等を思ふ歌、世間の住りよそま

難きを哀む歌を撰定す。

十一月、大宰の官人等香椎の廟に詣づ。

三月十二日、長屋の王をして自盡せしむ。その男膳夫の王等も亦自死す。

八月五日、改元。

十月七日、大伴旅人、日本琴を藤原房前に贈る。

二年(一三九〇)庚午

十一月八日、藤原房前、大伴旅人の琴を贈れるを謝す。
正月十三日、旅人邸梅花の宴。
春、大伴旅人、松浦河に遊ぶ。
六月、旅人、瘡を病む。

七月十日、吉田宣、書を大伴旅人に贈る。

十月一日、大伴旅人を大納言に任ず。

十一月、大伴旅人の従人等、海路、京に上る。

十二月六日、大伴旅人邸に於いて、餞酒の宴を開く。

三年(一三九一)辛未

六月十三日、大伴熊凝、相撲使某の従人となりて京に上る。

七月二十五日、大伴旅人薨す。

四年(一三九二)壬申

二月二十二日、阿倍廣庭薨す。

八月十七日、多治比廣成を遣唐大使とし、藤原宇合を西海道節度使とす。高橋蟲麻呂歌を贈る。蟲麻呂の作品中、年月の明なる唯一のもの。

正月十三日、縣犬養橋三千代薨す。

五年(一三九三)癸酉

二月三十日、出雲國風土記を勸造す。

三月一日、山上憶良、好去好來の歌を遣唐使に贈る。

閏三月、笠金村、歌を入唐使に贈る。笠金村の作品中年月の明なる最後。

五月三日、遣唐の船難波より進發す。

六月三日、山上憶良、老身重病の歌を作る。

十一月、大伴坂上郎女、大伴氏の神を祭る。

山上憶良、沈痾自哀文を作る。

この歳憶良卒するか。時に年七十四。

六年(一三九四)甲戌

この歳、海犬養岡麻呂、詔に應ふる歌を作る。

七年(一三九五)乙亥

三月十日、入唐大使多治比廣成等唐國より至る。

九月三十日、新田部の親王薨す。

十一月十四日、舍人の親王薨す。

この歳、尼理願死す。

八年(一三九六)丙子

二月二十八日、阿倍繼麻呂を遣新羅大使とす。

六月、芳野の宮に幸す。山部赤人の作品中、年月の明なる最後。

同月、遣新羅使人の船、難波を發す。

十一月十七日、葛城の王等に姓を賜ふ。

十二月、葛井廣成の家の宴の歌。

九年(一三九七)丁丑

正月二十七日、遣新羅使人入京す。

同月、門部の王の家の宴。

十年(一三九八)戊寅
 二月、巨勢宿奈麻呂の家の宴の歌。
 三月、遣新羅使の副使大伴三中歸京す。
 四月十七日、藤原房前薨す。
 四月、大伴坂上郎女、賀茂神社に詣づ。
 六月十八日、長田の王卒す。
 同月二十八日、多治比縣守薨す。
 七月十三日、藤原麻呂薨す。
 同月二十五日、藤原武智麻呂薨す。
 八月一日、橘佐爲卒す。
 八月五日、藤原宇合薨す。
 十二月二十七日、大倭の國を改めて大養徳の國とす。
 是の歳、疫瘡大に發す。
 六月十一日、小野老卒す。(正倉院文書によりて推定する説に従ふ。續日本紀には天平九年とす。)
 八月、橘諸兄の家に宴す。
 十月、橘奈良麻呂の家に宴す。
 この歳、元興寺の僧自嘆する歌。

十一年(一三九九)己卯

三月二十八日、石上乙麻呂、土佐に流さる。(萬葉に十年に編す。)

四月七日、多治比廣成薨す。

六月、家持、妾を亡ふ。

六月十五日、流人穗積老等を赦して入京せしむ。

九月三日、藤原廣嗣反す。

十月二十九日、伊勢の國に行幸す。

十一月二日、車駕伊勢の國に到る。

十二月十五日、恭仁の宮に幸して始めて宮都を作る。

閏三月、五位以上の意のままに平城に住むを禁す。

十二月十九日、大原高安卒す。

五月五日、内裏に宴す。皇太子みづから五節を舞ふ。

閏正月十一日、安積の親王薨す。

二月二十六日、難波の宮を皇都と定む。

七月二十日、高橋某、妻を失ふ。

正月一日、新京紫香樂の宮に遷る。

二月二十三日、大原門部卒す。

四月二十八日、春日の王卒す。

十七年(一四〇五)乙酉

十三年(一四〇一)辛巳
 十四年(一四〇二)壬午
 十五年(一四〇三)癸未
 十六年(一四〇四)甲申

十二年(一四〇〇)庚辰

十八年(一四〇六)丙戌

五月十一日、平城の京に幸す。
正月、太上天皇の御在所に雪の宴を行ふ。
六月二十一日、大伴家持を越中守とす。

七月、家持赴任。

九月、大伴書持死す。

十九年(一四〇七)丁亥

二月、家持病に沈む。

三月十六日、大養徳の國を改め舊に依りて大倭の國となす。

五月、家持京に入る。

九月、家持放逸せる鷹を夢む。

二十年(一四〇八)戊子

四月二十一日、太上天皇(元正天皇)崩す。

孝謙天皇
天平勝寶元年(一四〇九)己丑

二月二日、行基遷化す。

二月二十二日、陸奥の國始めて黄金を買す。

四月一日、天皇、東大寺に幸して盧舍那佛の像の前殿に御す。

四月十四日、改元して天平勝寶元年とす。

七月一日、讓位。孝謙天皇即位、改元して天平勝寶元年とす。

八月二十六日、穗積老卒す。

二年(一四一〇)庚寅

二月、中臣清麻呂宅の宴。

秋、大伴坂上郎女、歌を坂上大嬢に與ふ。坂上郎女のことの見ゆる最後。

九月一日、石上乙麻呂薨す。

同月二十四日、藤原清河を遣唐大使とし、大伴古麻呂を副使とす。

七月十七日、家持、少納言に任ぜらる。

十一月、懷風藻成る。

四年(一四一二)壬辰

三月十七日、阿倍蟲麻呂卒す。

四月九日、盧舍那佛の像成り開眼す。

九月七日、文室智努、佛足跡を寫す。

五年(一四一三)癸巳

三月三十日、巨勢奈氏麻呂薨す。

七月十一日、紀清人卒す。

六年(一四一四)甲午

七月、市原の王、歌林七卷を書寫せしむ。

正月十六日、大伴古麻呂等唐より歸る。唐僧鑿真從ひて來る。

四月五日、大伴家持を兵部少輔とす。

七年(一四一五)乙未

正月四日、天平勝寶七年を天平勝寶七歳となす。

二月、筑紫に差遣せらるる諸國の防人等、難波に至る。

八年(一四一六)丙申

一月二十八日、難波の宮に幸す。

五月二日、太上天皇(聖武天皇)崩す。

天平寶字元年(一四一七)酉丁

五月二日、大伴古慈悲、淡海三船を左右衛士府に禁ず。

正月六日、橘諸兄薨す。

二月十日、藤原仲麻呂の宅に遣渤海大使小野田守等を餞す。

七月四日、鹽燒の王、安宿の王、黄文の王、橘奈良麻呂等を獄に下す。

八月十八日、改元。

淳仁天皇二年(一四一八)戌戊

六月十六日、大伴家持を因幡守となす。

八月一日、讓位、淳仁天皇即位。

正月一日、因幡守大伴家持、宴を下僚等に賜ふ宴の歌(萬葉集中年月の明なる最後の歌)。

四年(一四二〇)庚子

六月七日、天平應眞仁正皇太后(光明皇后)崩す。

六年(一四二二)寅壬

九月三十日、石河年足薨す。

七年(一四二三)卯癸

五月六日、應眞寂す。

八年(一四二四)辰甲

正月二十一日、大伴家持を薩摩守とす。

九月十一日、藤原惠美押勝(仲麻呂)逆謀泄る。

同月十八日、石村石楯、押勝を斬る。

正月七日、改元。

十月九日、稱徳天皇重祚。

稱徳天皇
天平神護元年(一四二五)乙巳

光仁天皇
寶龜元年(一四三〇)庚戌

十一月二十七日、藤原豐成薨す。

三月二十七日、葛井、船、津、文、武生、藏六氏の男女二百三十人歌垣を奉仕す。

八月四日、稱徳天皇崩す。

九月十六日、大伴家持を左中辨兼中務大輔とす。

十月一日、即位、改元。

同月九日、文室淨三(智努)薨す。

二月二十二日、藤原永手薨す。

五月七日、藤原濱成、歌經標式を奏上す。

五月二十五日、大伴御依卒す。

五月十七日、大津大浦卒す。

十月二日、吉備眞備薨す。

七月七日、大伴駿河麻呂卒す。

八月十九日、大伴古慈悲薨す。

二月八日、眞人元開、唐大和上東征傳を撰す。

四月三日、即位。

五月十七日、石上宅嗣薨す。

八月八日、大伴家持を左大辨兼春宮大夫となす。これより先母の憂に遭ひて解任し

桓武天皇
天應元年(一四四一)酉辛

十年(一四三九)未己

八年(一四三七)巳丁

七年(一四三六)辰丙

延暦元年(一四四二)戊戌

四年(一四四五)乙丑

ここに至りて復す。

十二月二十三日、太上天皇(光仁天皇)崩す。

正月十九日、氷上川繼の事に座して大伴家持等の官位を解く。

五月十七日、參議大伴家持を春宮大夫と爲す。

七月十七日、淡海三船卒す。

八月二十八日、大伴家持死す。

九月二十三日、藤原種繼薨す。

番號順索引

二 一	二 〇	一 九	一 八	一 七	一 六	一 五	一 四	一 三	八	七	六	五	四	三	二	一	卷 一
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
104	101	99	98	97	100	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85
四 一	四 〇	三 九	三 八	三 七	三 六	三 五	三 四	三 三	三 二	三 一	三 〇	二 九	二 八	二 七	二 五	二 四	二 三
上	上	上	上	上	上	中	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
37	35	34	33	32	31	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
六 五	六 四	六 三	六 二	六 一	五 八	五 七	五 六	五 五	五 四	五 三	五 二	五 一	五 〇	四 九	四 八	四 七	四 六
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
一 三 三	一 三 二	一 三 一	一 二 五	一 二 四	一 二 三	一 一 三	一 〇 六	一 〇 五	一 〇 四	一 〇 三	九 五	卷 二	八 三	八 二	八 一	七 七	七 六
上	上	上	中	中	中	上	上	上	上	上	上	上	中	中	中	中	中
51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
一 六 八	一 六 七	一 六 六	一 六 五	一 六 四	一 六 三	一 五 九	一 五 八	一 五 七	一 五 三	一 五 〇	一 四 八	一 四 七	一 四 六	一 四 五	一 四 四	一 四 三	一 四 二
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7

番號順索引

一三三五

三三三	三三六	三三七	三三八	三三九	三四〇	三四一	三四二	三四三	三四四	三四五	三四六	三四七	三四八	三四九	三五〇	三五一	三五二	三五三	三五四	三五五	三五六	三五七	三五八	三五九	三六〇
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
四八九	五五六	五五五	五五四	五五三	五五二	五五一	五五〇	五四九	五四八	五四七	五四六	五四五	五四四	五四三	五四二	五四一	五四〇	五三九	五三八	五三七	五三六	五三五	五三二	五三一	五三〇
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
三六一	三六二	三六三	三六四	三六五	三六六	三六七	三六八	三六九	三七〇	三七一	三七二	三七三	三七四	三七五	三七六	三七七	三七八	三七九	三八〇	三八一	三八二	三八三	三八四	三八五	三八六
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
四一八	四一七	四一六	四一五	四一四	四一三	四一二	四一一	四一〇	四〇九	四〇八	四〇七	四〇六	四〇五	四〇四	四〇三	四〇二	四〇一	四〇〇	三九九	三九八	三九七	三九六	三九五	三九四	三九三
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
二八二	二八一	二八〇	二七九	二七八	二七七	二七六	二七五	二七四	二七三	二七二	二七一	二七〇	二六九	二六八	二六七	二六六	二六五	二六四	二六三	二六二	二六一	二六〇	二五九	二五八	二五七
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
四一九	四三一	四三二	四三三	四三四	四三五	四三六	四三七	四三八	四三九	四四〇	四四一	四四二	四四三	四四四	四四五	四四六	四四七	四四八	四四九	四五〇	四五二	四五三	四五四	四五五	四五八
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
四二一	四二二	四二三	四二四	四二五	四二六	四二七	四二八	四二九	四三〇	四三一	四三二	四三三	四三四	四三五	四三六	四三七	四三八	四三九	四四〇	四四一	四四二	四四三	四四四	四四五	四四八
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
四九六	四九七	四九八	四九九	五〇〇	五〇一	五〇二	五〇三	五〇四	五〇五	五〇六	五〇七	五〇八	五〇九	五〇一	五〇二	五〇三	五〇四	五〇五	五〇六	五〇七	五〇八	五〇九	五一〇	五一八	
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
五七〇	五七〇	五七一	五七二	五七三	五七四	五七五	五七六	五七七	五七八	五七九	五八〇	五八一	五八二	五八三	五八四	五八五	五八六	五八七	五八八	五八九	五九〇	五九一	五九二	五九三	五九六
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
七二四	七二三	七二二	七二一	七二〇	七一九	七一八	七一七	七一六	七一五	七一四	七一三	七一二	七一〇	七〇九	七〇八	七〇七	七〇六	七〇五	七〇四	七〇三	七〇二	七〇一	七〇〇	六九九	六九六
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
五七一	五九三	五九四	五九五	五九六	五九七	五九八	五九九	六〇〇	六〇一	六〇二	六〇三	六〇四	六〇五	六〇六	六〇七	六〇八	六〇九	六一〇	六一一	六一二	六一三	六一四	六一五	六一八	
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
八六八	八六九	八七〇	八七一	八七二	八七三	八七四	八七五	八七六	八七七	八七八	八七九	八八〇	八八一	八八二	八八三	八八四	八八五	八八六	八八七	八八八	八八九	八九〇	八九一	八九二	八九五
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中

一六九	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一				
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	
二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	
一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一八	
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
二二一	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二	二三三	二三四	二三五	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二	二四三	二四四	二四五	二四八
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
二五五	二五六	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四	二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八四	
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
二九六	二九七	二九八	二九九	三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三	三〇四	三〇五	三〇六	三〇七	三〇八	三〇九	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中

三八一六	三八一九	三八二〇	三八二四	三八二五	三八二六	三八二七	三八二八	三八二九	三八三〇	三八三一	三八三四	三八三五	三八三六	三八三八	三八三九	三八四四	三八四五	三八四六	三八四七	三八四九	三八五〇
中四五	中八四	中八四	上毛〇	上毛一	上毛二	上毛三	上毛四	上毛五	上毛六	上毛七	上毛八	上毛九	上毛〇	上毛一	上毛二	上毛三	上毛四	上毛五	上毛六	上毛七	上毛八
三八五一	三八五二	三八五三	三八五四	三八五五	三八五六	三八五七	三八五八	三八五九	三八六〇	三八六一	三八六二	三八六三	三八六四	三八六五	三八六六	三八六七	三八六八	三八六九	三八七〇	三八七一	三八七二
下三七三	下三七二	下三七二	下三七二	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五	中八五
三八八二	三八八三	三八八四	三八八五	三八八六	三八八七	三八八八	三八八九	三八九〇	三八九一	三八九二	三八九三	三八九四	三八九五	三八九六	三八九七	三八九八	三八九九	三八九九	三八九九	三八九九	三八九九
下三五五	下三五五	下三五五	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九	上五九
三九二六	三九三〇	三九三二	三九三三	三九三四	三九三九	三九四〇	三九四一	三九四二	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七	三九四七
中七五	中九五	中九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五	下九五
四〇〇五	四〇一一	四〇一二	四〇一三	四〇一四	四〇一五	四〇一六	四〇一七	四〇一八	四〇二〇	四〇二一	四〇二二	四〇二三	四〇二四	四〇二五	四〇二六	四〇二七	四〇二八	四〇二九	四〇三〇	四〇三一	四〇三二
下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三	下六三
四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五	四〇〇五

卷十七

卷十八

四〇四五	四〇四八	四〇四九	四〇五〇	四〇五五	四〇五六	四〇五七	四〇五八	四〇五九	四〇六〇	四〇六一	四〇六二	四〇六五	四〇八〇	四〇八一	四〇八二	四〇八三	四〇八五	四〇八六	四〇九四	四〇九五	四〇九六	四〇九七	四〇九八
下六四	下六五	下六五	下六五	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	中六六	下六六	下六六	下六六	下六六	下六六
四〇九九	四〇〇〇	四〇〇一	四〇〇二	四〇〇三	四〇〇四	四〇〇五	四〇〇六	四〇〇七	四〇〇八	四〇〇九	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇	四〇一〇
下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇	下二〇〇
四一三八	四一三九	四一四〇	四一四一	四一四二	四一四三	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四	四一四四
下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五	下二〇五
四一九三	四一九九	四二〇四	四二〇五	四二〇六	四二〇七	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八	四二〇八
下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三	下二〇三
四二六〇	四二六一	四二六二	四二六三	四二六四	四二六五	四二七四	四二七五	四二七六	四二七八	四二八九	四二九〇	四二九一	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二	四二九二
上二一	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八	中六八
四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇	四二六〇

卷十九

卷二十

四三三三	中	七七	四三六四	中	七四	四四〇七	中	七九	四四三六	中	八三	四五〇九	中	八八
四三二四	中	七五	四三六七	中	七五	四四〇八	中	八九	四四三三	中	八一	四五〇〇	中	八八
四三二五	中	七五	四三六八	中	七五	四四〇九	中	八三	四四六三	中	八一	四五〇一	中	八一
四三二六	中	七〇	四三七〇	中	七六	四四一〇	中	八三	四四六五	中	八一	四五〇二	中	八一
四三二七	中	七一	四三七二	中	七七	四四一一	中	八四	四四六六	中	八一	四五〇三	中	八一
四三二八	中	七二	四三七三	中	七八	四四一二	中	八四	四四六七	中	八一	四五〇四	中	八一
四三二九	中	七二	四三七四	中	七八	四四一三	中	八四	四四六八	中	八一	四五〇五	中	八一
四三三〇	中	七三	四三七五	中	七八	四四一四	中	八四	四四六九	中	八一	四五〇六	中	八一
四三三一	中	七三	四三七七	中	七八	四四一五	中	八四	四四七〇	中	八一	四五〇七	中	八一
四三三二	中	七三	四三七七	中	七八	四四一六	中	八四	四四七一	中	八一	四五〇八	中	八一
四三三三	中	七三	四三七七	中	七八	四四一七	中	八四	四四七二	中	八一	四五〇九	中	八一
四三三四	中	七三	四三八〇	中	七八	四四一八	中	八四	四四七三	中	八一	四五一〇	中	八一
四三三五	中	七三	四三八二	中	七八	四四一九	中	八四	四四七四	中	八一	四五一一	中	八一
四三三六	中	七三	四三八五	中	七八	四四二〇	中	八四	四四七五	中	八一	四五一二	中	八一
四三三七	中	七三	四三八八	中	七八	四四二一	中	八四	四四七六	中	八一	四五一三	中	八一
四三三八	中	七三	四三八八	中	七八	四四二二	中	八四	四四七七	中	八一	四五一四	中	八一
四三三九	中	七三	四三八八	中	七八	四四二三	中	八四	四四七八	中	八一	四五一五	中	八一
四三四〇	中	七三	四三八八	中	七八	四四二四	中	八四	四四七九	中	八一	四五一六	中	八一
四三四一	中	七三	四三八八	中	七八	四四二五	中	八四	四四八〇	中	八一	四五一七	中	八一
四三四二	中	七三	四三八八	中	七八	四四二六	中	八四	四四八一	中	八一	四五一八	中	八一
四三四三	中	七三	四三八八	中	七八	四四二七	中	八四	四四八二	中	八一	四五一九	中	八一
四三四四	中	七三	四三八八	中	七八	四四二八	中	八四	四四八三	中	八一	四五二〇	中	八一
四三四五	中	七三	四三八八	中	七八	四四二九	中	八四	四四八四	中	八一	四五二一	中	八一
四三四六	中	七三	四三八八	中	七八	四四三〇	中	八四	四四八五	中	八一	四五二二	中	八一
四三四七	中	七三	四三八八	中	七八	四四三一	中	八四	四四八六	中	八一	四五二三	中	八一
四三四八	中	七三	四三八八	中	七八	四四三二	中	八四	四四八七	中	八一	四五二四	中	八一
四三四九	中	七三	四三八八	中	七八	四四三三	中	八四	四四八八	中	八一	四五二五	中	八一
四三六〇	中	七三	四三八八	中	七八	四四三四	中	八四	四四八九	中	八一	四五二六	中	八一
四三六一	中	七三	四三八八	中	七八	四四三五	中	八四	四四九〇	中	八一	四五二七	中	八一
四三六二	中	七三	四三八八	中	七八	四四三六	中	八四	四四九一	中	八一	四五二八	中	八一

初句索引

あ

あかごまの	上	三六六	あきさらば	中	六九	あきりする	中	四八
いゆきはばかる	上	三六六	あきされば	中	七三	あしがきの	中	四八
こゆるうませの	中	三六六	あきたかる	中	七三	あしがらの	中	四八
あかごまを	中	三六六	あきたちて	中	七三	あしかたまはり	中	四八
あかとときと	中	三六六	あきつかみ	中	七三	あしかにたして	中	四八
あがぬしの	中	三六六	あきつしま	中	七三	あしたまも	中	四八
あかねさす	中	三六六	あきのとき	中	七三	あしのやのうなひをとめの	中	四八
ひはてらせれど	上	三六六	あきののに	中	七三	おくつきを	中	四八
むらさきのゆき	上	三六六	あきたるはなを	中	七三	やとせごの	中	四八
あがもての	上	三六六	さけるあきはぎ	中	七三	あしはらの	中	四八
あきかせの	中	三六六	やどるたびびと	中	七三	みづほのくにに	中	四八
さむきあさけを	中	三六六	あきのの	中	七三	みづほのくにに	中	四八
ふきこきしける	中	三六六	あきはぎに	中	七三	あしひきの	中	四八
ふきただよはす	中	三六六	あきはぎの	中	七三	たまかづらのこ	中	四八
ふきにしひより	中	三六六	えだもとををに	中	七三	やつをのきぎし	中	四八
あきかせは	中	三六六	ちりのみだりに	中	七三	やまかづらのこ	中	四八
あきがはり	中	三六六	あきはぎは	中	七三	やまがはのせの	中	四八
			かりにあはじと	中	七三	やまさかこえて	中	四八
			さくべくあるらし	中	七三	やまさくらばな	中	四八
			あきはぎを	中	七三	やまさはるぐを	中	四八
			あきやまに	中	七三	やましたひかけ	中	四八
			あきやまの	中	七三			

初句索引 あ

一三四七

やまぢこえむと	中 八四九	あづさゆみ	下 二四七	あまぐもに	下 二六六	あままかけて	下 二〇六
やまどりのをの	下 二九〇	すゑはしらねど	下 二四七	あまぐもの	中 六六二	あまをぶね	下 二三五
やまにものにも	中 六四〇	つまびくよとの	中 四四〇	あまぐもを	中 八八九	あみのうらに	上 二三五
やまにゆきけむ	中 四三〇	ひきみゆるべみ	下 二八四	あまごもり	下 九〇〇	あめつちと	上 一三五
やまのこぬれの	下 一〇三四	ゆつかまきかへ	下 三〇〇	あまざかる	中 五〇〇	ともにをへむと	上 一五六
やまのもみぢば	中 八八二	あどもへか	下 三三二	ひなにいつとせ	中 四四〇	ひさしきまでに	下 二〇七
やまゆきくらし	下 二四四	あなみにく	中 四四四	ひなになかかす	下 九六六	あめつちに	下 二七六
やまゆきしかば	中 四四九	あにもあらぬ	中 三三三	ひなのあらのに	上 三三二	あめつちの	下 二七六
あしびなす	下 二二〇	あのおとせず	下 二九三	ひなのながぢゆ	上 二七七	かみをいのりて	中 七九
あしべゆく	上 三六一	あはぢの	上 二六一	ひなのやつこに	中 九七	かみをわれは	下 三三九
かものながひに	上 三六一	あはむひの	中 八四四	あまとぶや	中 九七	そこひのうらに	中 八四四
かりのつばさを	下 二八四	あはもや	上 八九	かりをつかひに	中 七三	とほきがごとく	中 六四三
あすかがは	上 二五〇	あひおもはぬ	下 九三	かるのみちは	上 二六六	はじめのとき	上 二〇九
あすだにみむと	中 六三六	あひみては	下 九三	とりにもがもや	中 五二六	わかれしときゆ	中 六六六
かはよどさらず	上 二四九	あふみのうみ	上 三六七	あまのがは	上 三六	あめつちを	中 八八三
しがらみわたし	上 二四九	とまりやそあり	下 二二二	みづかけぐさの	下 三三〇	てらすひつきの	下 二五六
あすのよひ	上 二五三	あふらみちどり	上 一九	あまのはら	下 三三〇	なげきこひのみ	下 二二〇
あはざらめやも	下 二二八	あべのしま	下 九七	くもなきよひに	下 二四六	あめにあるや	下 二七四
てらむつくよは	中 六四四	あまかぞふ	中 六四七	ふじのしばやま	下 二八九	あめにはも	下 二〇五
あすよりは	中 六四四	あまざらひ	上 二五九	あまはしも	下 三三九	あめのうみに	上 三三七
あたひなき	中 六四四						
あぢさはふ	中 六四三						

つきのふねうけ	下 二二三	あらをらは	中 五〇〇	いかにして	下 二三八	いそのうへの	下 二〇五
あめのした	中 七五一	あらをらを	中 五〇八	いかほねに	下 二二六	いそのかみ	中 八〇〇
あめはれし	下 二〇四	ありさりて	下 九四三	いかほろの	下 三三六	いそのさき	上 二〇〇
あもと同じも	中 七六一	ありつとも	中 四七〇	いぐしたて	下 三三〇	いちにの	上 二七三
あゆちがた	下 二二三	ありねよし	上 三七八	いけがみの	上 三三六	いづくにか	上 三三三
あゆのかぜ	下 九三	あわゆきの	中 四九	いけるもの	下 二八五	ふなはてすらむ	上 三三三
あらたしき	下 九三	あをうなばら	中 七四	いけるよに	中 四九七	われはやどらむ	上 三三二
としのはじめに	中 七三	あをこまの	上 三〇六	いこまやま	下 九三	いつはりも	下 二二七
としのはじめの	下 二八七	あをはたの	上 二〇	いざこども	上 二五九	いでわがこま	下 二二六
あらたへの	中 五五五	あをみづら	上 三三六	かしひのかたに	中 四六七	いとこなせのきみ	下 二四九
ぬのきぬをだに	上 二六三	ならにあるいもが	下 二〇〇	たはわざなせそ	中 八四四	いとまあらば	上 二八〇
ふぢえがうらに	中 五五五	ならのおほぢは	中 八五一	はやくやまとへ	上 三三九	いなといへど	中 六四四
あらたまの	上 二六三	ならのみやこに	中 七〇五	いさなとり	中 四六七	かたれかたれと	上 二四四
としのへゆけば	下 二二〇	ならのみやこは	中 三六六	あふみのうみを	上 二二	しふるしひのが	上 二四三
としのをながく	下 二〇〇	ならのやまなる	中 四四	いせのうみの	下 九四	いなびのも	上 二四五
あらつのうみ	中 五〇七	あをやぎの	下 三三〇	いそかげの	下 二七	いなもりの	下 二四五
あらなみに	上 三三〇	あをやまの	中 八八	いそごと	中 五〇八	いなもりの	下 二四五
あられうつ	上 三三〇	あをやまを	中 八八	いそのうへに	上 二五	いにしへに	下 二四三
あられふり	中 七六			おふるあしびを	中 五三	ありけむひとの	中 六六一
かしまのかみを	下 二二三			ねはふむろのき	中 五三	ありけむひとわがごとか	中 六六一
きしまがたけを	下 二二三						
あらをら	中 五〇六						

いもにこひつ	上 二六〇	いはばしる	つかひなるらし	上 三三三	いもにあはず	中 七〇〇
ありけむひともわがごとか	上 三六八	いはほすら	いはほらの	中 四〇三	いもにこひ	中 四四三
みわのひばらに	上 三六八	いはまろに	いまのよにし	中 四〇六	あがのまつばら	中 四四三
いもとわがみし	上 三八〇	いはみのうみ	いまのみの	上 二六一	いねぬあさけに	上 三三三
きみのみよへて	中 三八〇	いはみのや	いまもかも	中 九〇三	いももわれも	上 三三三
やなうつひとの	下 三三五	いはむすべ	いまゆきて	下 一〇九九	いやひこ	上 三三三
いにしへの	下 三三五	いはろには	いまよりは	中 七九四	おのれかむさび	下 一三五五
ことはしらぬを	下 三三五	いはろにつも	いみづかは	下 九五三	かみのふもとに	下 一三三六
ななのさかしき	中 三六八	いへにありて	いめにだに	下 一七〇	いゆきあひの	中 六〇六
ふるきつつみは	中 三六八	いひはめど	いめにみて	下 二〇七	いろふかく	中 六〇六
いにしへを	下 一〇〇〇	いへおもふと	いめのあひは	下 九七〇	うぐひすの	中 六〇六
いねつけば	下 一〇〇〇	いへづとに	いめのごと	下 九七〇	かひこのなかに	中 六〇六
いはがねの	中 三六八	いへにあらば	いりがみかはの	上 三三九	なくくらたにに	下 九七〇
いはしろの	上 三六八	いへにありし	いもがため	上 三六五	うさかがは	下 九七〇
きしのまつがえ	上 三六八	いへにあれば	いもがなは	下 二四七	うちそを	上 一三五
のなかにたてる	上 三六八	いへにして	いもがなは	中 四〇四	うちなびく	下 一〇九三
はままつがえを	上 三六八	こひつつあらずは	いもがなは	下 二八七	うちひさす	中 八八五
いはせのに	下 一〇五一	われはこひむな	いもがへに	中 四〇四	みやけのはらゆ	下 一三三
いはそそぐ	中 四〇六	いへにても	いもとし	中 五〇八	みやのせがはの	下 一三三
いはたのに	中 四〇六	いへびとの	いもとして	中 五〇八		
いはとわる	上 一三三	いはへにかあらむ		中 五〇八		
いはのいもる	中 八〇〇			中 五〇八		

うちまやま	中 四九七	いまさかりなり	おほらうみに	下 二二六
うつくしき	中 四九七	いめにかたらく	おほらうみの	中 五〇〇
うつせみし	上 二二二	かをかぐはしみ	おほくもしらす	中 五〇〇
うつせみと	上 二二二	さきてちりなば	みなそことよみ	下 二二六
うつせみの	上 二二七	しだりやなぎに	おほきうみの	中 八四四
うつせみは	下 二〇七	ちらまくをしみ	おほきみの	下 二二六
うつそみの	下 二〇九	うらうらに	しほやくあまの	下 二二六
うつりゆく	中 八七	うらさぶる	つかはさなくに	中 五〇六
うなばらに	中 八七	うらわかみ	つぎてめすらし	中 四四九
うなばらの	中 八七	うりはめば	とほのみかどぞ	下 二二六
とほきわたりを	中 八七	うるはしと	とほのみかどとありがよふ	上 二二六
ねやはらこすげ	下 二二六		とほのみかどとおもへれど	中 七二九
みちとほみかも	下 二二六		まけのまにまに	中 八〇九
ゆたけきみつ	下 二二六		みかさのやまの	下 二二六
うなばら	中 七〇六		みことかしこみあをくむの	中 七〇六
うねめの	上 一四四		みことかしこみいそにふり	中 七〇六
うまかはば	下 二二六		みことかしこみおほあらし	中 七〇六
うまごり	中 四三二			
うまさけ	上 二二六			
うまのおとの	下 二二六			
うまやなる	中 八〇一			
うめのはな	中 八〇一			

初句索引

一三五二

みことかしこみさしならぶ	中 六八二	まかぢしじぬきこのあこを	中 六八五	おもひやる	下 六八六	やまべのみちを	中 四四三
みことかしこみつまわかれ	中 八八六	をぶねひきそへ	中 五八三	おもへども	下 二九〇	かすがやま	
みことかしこみみれどあかぬ	下 二二六	おほふねを	中 四四六	おるかにぞ	下 二七六	おしててらせる	下 二一九
みことかしこみゆみのみたぬ	下 二二六	おほとのの	中 四四六	か	下 九九五	かすみたなびき	下 九四四
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かききらし	中 六八八	かすみたつ	上 六八
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かぜふけば	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かぜまじり	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かぜをだに	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かたおもひを	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かたかひの	下 九四九
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かつしかの	
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	ままのいりえに	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	ままのてこなを	下 二二二
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	ままのゐをみれば	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かつまだの	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かどたてて	中 六八五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	とはさしたるを	下 二二七
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	とはさしたれど	下 二二八
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かなとにし	中 五九五
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かにかくに	下 九三二
みことかしこみゆみのみたぬ	中 七七八	おほとのの	中 四四六	かきつばた	中 六八八	かのころと	下 二二〇

欠

欠

こいしふみわたり 中 八八九	しづたまき 中 五五七	しまがくり 中 六五四	しらぬひつくしのわたは 中 五五八
きほすぎて 中 四九九	しながどり 中 五五五	しまかげに 中 八四四	
さよふけて 下 二二六	しなてる 中 五九九	しましくも 中 七三三	しるしなき 下 二二七
さわたりの 下 三〇九	しなのぢは 下 三九四	しまづたひ 下 二二七	こひをもするか 下 二二八
	しなのなる 下 二八八	しまのみや 下 二二六	ものをもはずは 中 四九〇
しかのあまは 中 四四〇	すがのあらのに 下 二八八	しまやまに 下 二二六	しろかねも 中 四九〇
しかのやま 中 五五六	ちぐまのかはの 下 二九五	しまやまを 中 六〇四	しろかみし 下 二四〇
しかれこそ 下 三三八	しなばこそ 下 二四〇	しもつけの 下 三九七	しろたへの 下 三〇〇
しきしまの 下 三三八	しにもいきも 下 二四三	しものうへに 下 二〇三	ころものそでを 下 二五〇
やまとのくににあきらけき 下 一〇七	しばつやま 上 三九九	しらがふる 中 八四三	そでのわかれを 下 二五二
やまとのくににひとさばに 下 三〇八	しばつくと 下 二〇八	しらぎへか 中 七三三	しやうじの 下 二七〇
やまとのくににひとふたり 下 三〇八	さきのありそに 下 九五	しらくもの 中 七三三	しをぢから 下 九七
やまとのくににひとふたり 下 三〇八	ふたがみやまに 下 一三五	たつたのやまのたぎのうへ 中 六〇三	すぎののに 下 一〇元
やまとのくににひとふたり 下 三〇八	しづたにを 下 二四五	たつたのやまのつゆじもに 中 六〇三	すごもしき 上 一七
やまとのくににひとふたり 下 三〇八	しほけたつ 上 三三七	の 中 六〇三	すながねの 下 二九六
しきたへの 上 三三四	しほさあに 上 三三七	たつたのやまを 中 六〇三	すすのあまの 下 二〇一
しぐれのあめ 中 六九	しほつやま 中 六九	すすのうみに 下 九六	すはうなる 下 九六
まなくしふれば 中 六九	しほふねの 中 七八五	しらたまの 下 一〇二	すべもなき 中 五〇
まなくなふりそ 中 七五	しほまつと 中 七二	しらたまを 下 一〇二	すべもなく 中 五〇
しづけくも 下 二四二	しほみてば 中 七二	しらとりの 上 一七三	
	しほひなば 中 六八	しらなみの 上 一七三	

初旬索引 し、す

もしきの おほみやびとのかづらける 下 一〇九七	かむながら 上 二〇四	とこみやと 中 六四一	やまとへ 中 五〇四
おほみやびとのにぎたづに 中 六五七	たかてらすひのみこあらた 上 一八三	やすみししわごおほきみは 中 六四九	やまのかひ 中 七五一
おほみやびとのまかりでて 下 二二〇	たかてらすひのみこかむな 上 二二五	やすやす 中 七三二	やまのはの 中 七〇一
もしのの 下 二〇〇	たかひかるひのみこしきい 上 二二五	やたのの 下 二二二	やまのべの 下 二二二
ももづたふ 上 一四八	たかひかるわがひのみこの 上 二二五	やちくさの 下 二〇四	みゐをみがてり 中 四〇七
もものはな 下 一〇四〇	やすみししわがおほきみの 上 二二五	やぶなみの 下 二〇五	やまぶきの 中 一四一
ももふねの 中 七七七	あしたには 上 二〇	やほかゆく 下 九三	やみのよの 中 八〇三
ももへにも 上 二六三	きこしめす 上 一九	やまがはの 中 七〇九	
や かたをの 下 九七〇	たかしかす 中 七六	やまかほも 上 二〇八	ゆきかくる 下 二二〇
たかをてにす 下 九七〇	ゆふされば 上 二四	やまごしの 上 七二	ゆきこそは 上 三二五
ましろのたかを 中 八八九	をすくには 中 四四	やましろの 上 三二	ゆきのしま 下 一〇四九
やきだちの 中 八八九	やすみししわごおほきみ 中 四四	やまたかく 中 七四六	ゆきめぐり 中 六八
やきだちを 下 九六六	たかてらすひのみこあらた 上 一八	やまたかく 中 六四	ゆくかほの 中 三九
やすみししわがおほきみ 中 四三三	しをす 下 二六一	やまごちの 中 五五	ゆくさきに 中 五九
	やすみししわごおほきみのた 中 六六	やまとちは 中 五五	ゆだねまく 下 二五五
		なきてかくらむ 上 三三	ゆのはらに 中 四九
		むらやまあれど 上 五	ゆふかけに 下 二二二
			ゆふき 中 四九

ゆふされば 中 七六	あそびのみちに 中 四六	わがきぬを 下 二〇五	ものなおもほし 中 四七
あきかせむし 中 七〇〇	しげきかりいほに 下 二七〇	わがきみに 下 二〇五	わがせこそ 中 五八
ひぐらしきなく 上 九	よのなかは 中 七五	わかければ 中 五二	あがまつばらよ 上 一四
をぐらのやまに 中 八八	よのなかを 上 三六	わがこころ 下 二〇四	やまとへやると 中 七九
ゆふだち 中 八八	よのなかに 上 三五	わがこころ 下 二〇三	わがせなを 中 七九
ゆふだちの 中 八四	うしとおもひて 中 五五	わがさかり 上 三九	わがそのに 中 四三
あめうちふれば 中 八四	うしとやさしと 中 五五	いたくたちぬ 中 五五	わがたみ 下 一〇七
あめふるごとに 下 二二三	なににたとへむ 中 五五	またをちめやも 中 四八	わがたびは 中 七八
ゆふづくひ 中 八四	よのひとの 中 五五	わがせごと 上 三〇	わがたもと 中 八四
ゆふづくよ 中 八三	よのほどろ 中 五五	わがせごと 中 八七	わがにはの 中 八五
かげたちよりあひ 中 七七	いでつづくらく 下 九三	かへりきまさむ 中 八七	わがのうらに 中 八五
こころもしのに 中 八三	わがいでてくれれば 下 九三	けるきぬうすし 中 八九	わがふねは 上 六三
よ よきひとの 上 二六	よるひかる 下 九三	ささげてもたる 下 一〇三	わがほりし 下 一〇三
よぐたちに 下 一〇二	よるづよと 中 四九	そでかへすよの 下 二〇四	わがみかど 上 二六
よしのなる 中 八七	よるづよに 下 二二三	そなのらじと 下 二〇四	わがやどの 上 二六
よそにみし 中 八七	よをさむみ 下 二二三	たふさきにす 中 六三	いさきむらだけ 下 一〇一
よそにあて 中 八七	わがいのちし 中 八六	わがせこに 上 三九	うめさきたりと 中 八六
よつのふね 中 八七	わがいのちを 中 七九	うらこひをれば 上 三九	くずばひにけに 下 二七一
よのなかし 中 八七	わがおほきみ 中 四〇	わがこふらくは 下 二六	まつのはみつつ 中 八三
よのなかの 下 九六	わがかどゆ 中 七四	わがせこは 上 二七	をばなおしなべ 下 二二

初句索引 よ、わ

一三六三

わがゆきは	中六〇三	わしのすむ	中六〇	をとめらが	下二四〇
わかゆつる	中四八四	わたつみの	中七三三	おるはたのへを	上二六三
わがゆゑに	中七〇七	うみにいでたる	中七〇一	そでふるやまの	下二五三
いもなげくらし	中六九八	おきにもちゆきて	中七五二	をとめらの	中五五五
おもひなやせそ	中六九七	かしこきみちを	上七五	をのこやも	下二五四
わかれなば	上三三	とよはたぐもに	下二二五	をのとりて	下二六二
わがをかの	中七六八	わたつみは	中二九	をふのさき	
わぎめこと	中七六八	わたのそこ	下四九		
わぎもこが	中五二二	おきつしらなみ	中二九		
うゑしうめのき	下五九	しづくしらたま	下二七		
かたみのねぶは	下二〇三	わたるひの	下二七		
ころなぐきに	中六九六	われこそは	中七二		
したにもきよと	中六三三	われのみや	中六三		
ぬかにおひたる	中五二六	われもみつ	中七七		
みしともうらの	中九二	わるたびは			
わぎもこに		を			
わぎもこは		をがみかは			
わぎもこを		をがみに			
いさみのやまを		をくさをと			
ゆきてはやみむ		をしのすむ			
わけがため		をすくにの			
わぎみの					

初句索引終

有所權著作

發行所

東京市神田區神保町二丁目十番地
電話替口九座東京二一六九一番
電話略號(ヤマウ)

山海堂出版部

著者 武田祐吉

發行者 來島捨六
東京市神田區神保町二丁目十番地

印刷者 小笠原秀雄
東京市神田區錦町三丁目廿六番地

印刷所 秀好堂印刷所
東京市神田區錦町三丁目廿六番地

改訂 萬葉集新解 下卷
定價 金參圓五拾錢

昭和十五年三月十八日
發行

行刷

585

137_□

終

